はじめに

21世紀に入って、地球における人間居住に関し悲惨な事態が次々に報告されている。

2001年9月11日、アメリカの誇る現代文明都市ニューヨークの象徴、世界貿易センタービルが飛行機もろとものテロ攻撃によりあっけなく大地に沈んだ。この一瞬をテレビ画像を通じて世界の万人、億人が凝視した。

連鎖して、アメリカによるイラク攻撃、都市といわず農村といわずこの国の人間居住が破壊され、老若男女のおびただしい血が大地に流され続けている。パレスチナとイスラエルとの果てのない殺し合い、ロシア南部の学校テロ事件と、今世紀の幕開けは地獄絵である。

日本においても、最近、地域社会の根底において信頼のネットワークが少なからずほころび、不気味な事件が続いている。子殺し、親殺しが連日報道されている。自殺者が年に3万人を超えているという事態をどのように考えればいいのか。社会が少子高齢化、国際化あるいは情報化の過程に起きる必然的な事象なのか。

人間が生存し、生活を持続するための安全と安心な社会、居住環境こそ地球上にも日本にも今改めて求められている。

このことは、新宿（区）の都市の直面する課題と将来像を考える上でも基本的なことである。

一日の乗降客数が350万人にも及ぶ新宿駅、年間1億3000万人を集める世界有数の繁華街、歌舞伎町を抱える新宿は、他に較べて犯罪が多い。置き引き、強盗、粗暴犯が目立つ。

都市とはもともと人の集まる場所のことである。新宿はこの意味で都市の中の都市である。集合する人間が多様で、多ければ多いほど、不特定多数であるほど、安心と安全の対策が格段に、不断に必要である。巨大な人数が流動する新宿駅やその周辺は地震時に安全かということも問題である。

巨大なターミナルと盛り場を抱える新宿区は30万人の住民が住み続けている生活都市である。新宿駅周辺地域の他にも、300年、400年来の歴史の中に築かれてきた地域–四谷・外苑、飯田橋、神楽坂、若松、河田、早稲田、高田馬場、大久保、百人町、落合等が固有の景観を保ちながら大地に息づいている。ここには、地域社会を支える信頼の網が少なからず働いているようだ。と同時に国際化や情報化、少子高齢化の大きな波を受けて多分に変貌を余儀なくされている。大久保百人町のように外国人居住が常態化し、多文化共生のまちづくりが始まっているのもその一つの典型である。

新宿において物理的都市空間の過密化、狭隘化、老化、劣化が進み、防災上の問題となる地区、地域も見受けられる。大地震に備えて、巨大な流動人口を抱える新宿駅駅前広場の見直しが必要であろう。

雑居ビルの中にギャンブル系、性風俗系を含む多数の店がぎっしりと詰まった歌舞伎町も、問題である。歌舞伎町雑居ビルの一つが火災となり、44人の死者を出したのが奇しくも2001年の9月であった。

様々な都市機能集積地、巨大な人間が集まる新宿区は、もともと豊かな水と緑の資源を持つ恵まれた大地の中に築かれた都市である。江戸城の外濠、神田川に囲まれ、新宿御苑や明治神宮外苑、西口新宿公園、戸山公園、早稲田の杜などの大きな緑地を持っている。これらが緑道のネットワークでつながることは、環境共生時代を先端的に実現する新宿区の大きなテーマであるに違いない。

新宿は世界的に見ても極めて特異で先鋭的な都市である。新宿駅西口の超高層オフィス街と駅をはさんだ巨大盛り場歌舞伎町のコントラストは訪問者に強い印象を与える。今や巨大ターミナル化した新宿駅を核とした商業、娯楽、文化、学校などの集中、集積の様相には世界都市新宿の先端性が読みとれる。東京都は 1991 年、都庁を新宿に移転させた。これにより、行政的に世界都市東京の中心、新都心となったともいえる。これに呼応するように新宿の勢力圏が区境を超えて拡大している。しかしその様相はモザイク的、カオス的である。これに加えて世界中からの人、モノ、情報が間断なく流入し、そして拡散されている。

新宿のカオス的ともいえる巨大なエネルギーはどこに向かうのか？

新宿は何処にゆくのか？

これが新宿の将来像を求める新宿都市計画の基本的課題といえよう。この課題を解く一つの鍵は、新宿の歴史の中に埋め込まれた街の遺伝子（DNA）にあろうか。

新宿は江戸の建設と呼応して甲州街道と青梅街道の交叉点に宿場町としてつくられた。

（Ⅰ）江戸期の新宿は、出発点においてターミナルと宿場（盛り場）であり、これが新宿の DNA といえまいか。ターミナルに咲く赤いオアシスである。

（Ⅱ）明治期には新宿は盛り場としての発達にあわせて東京と郊外を結ぶ物流拠点を形成した。

（Ⅲ）大正−昭和初期には、東京外周市街地における交通の結節点化、盛り場・繁華街として栄えていった。新宿は東京の成長点となった。

（Ⅳ）昭和中後期には商業・業務行政中心、娯楽、文化などの複合集積がなされ、東京の副都心、新都心として巨大都市東京の明らかな核となった。盛り場としては銀座などと異なって、間抜けたところがあったのだが。

（Ⅴ）そして現在、平成時代である。ターミナル性、盛り場性という新宿の歴史に色濃く認められる DNA をいかに新しい時代状況の中で育成するのかが新宿のまちづくりの課題に違いない。

新宿という都市の発展の歴史の中で特筆すべきはこの都市を根底から否定・破壊した天災、人災である。江戸時代の地震と火事、大正の関東大震災、昭和の大戦災である。これは東京そのものの拡大発展の歴史の中の災害史とも重なっている。新宿にはこのパニックも復元し次なる発展に繋ぐ底力が認められる。

現在の新宿まちづくりを取り巻く状況の中で、誰が新宿をつくるのかが改めて大きな問題である。日本のまちづくり、都市計画のやり方がここに来て大きな転換期にさしかかり、国主導、行政主導の都市計画から、民の都市計画、住民、市民参加、企業参加の都市計画、まちづくりが強く求められているのである。

新宿の都市形成の歴史をみると、確かに江戸幕府、明治国家以来の国家の力、東京府市、区などの行政の力による梃子入れがあった。都市基盤整備、主な公共施設、建築などの建設は多く官によるところが大きい。この間、一定の法制度も整えて渾然たる都市活動に方向付けがなされてきた。

しかしながら、新宿の溢れるような発展を支えてきたのは地場の人々の力である。
この地域に住み、働き、楽しみ、往来する人々、これを支える商業、企業家の旺盛な日常活動に違いない。

江戸期における宿場町の経営者、明治以来の新宿駅周辺に集まった熱意溢れる商店主たちがこのまちを立ち上げ、都市発展の原動力となっている。時代を先取りし、先端都市の芽を育てて走り続けている主役はこの人々である。新宿に愛情を注ぎこの場所をもり立ててきた個人史の重なりの上に今日の新宿ができたと考える。

このたび、これに関わった何人かの方々にインタビューしてこの思いを一層深くしたところである。

21 世紀早々、地球の人間居住は地獄の黙示録的様相を示している。まちづくり、都市計画に関わる者の一人として、地球のどの土地、地上でも、人間の共生と平和共存を願う気持ちに切なるものがある。いかなる居住区においても、もう一度大地を見直し、これに希望の DNA を見出し、まちづくりに取り組むべき時である。

地球時代の都市計画における共通課題として、環境共生型の都市づくりがあり、新宿区はこれに呼応して水と緑、大地と水と森を中心にまず都市を再生すべき時である。

この大地、地盤の上に次々に芽吹く日本的世界的都市活動を育てることに新宿の将来像があると考える。

「にぎわいと暮らしと文化の先端都市」「大地に芽吹く先端都市新宿」がイメージされる。

平成 16 年 12 月

研究代表者　早稲田大学名誉教授
前早稲田大学理工学部建築学科教授
戸沼幸市

研究者
戸沼幸市　早稲田大学名誉教授
松本泰生　〃　理工学総合研究センター客員講師
斎藤京子　戸沼幸市都市計画研究室個人助手

研究協力者
堀越義章　早稲田大学理工学総合研究センター研究員
灰谷香奈子　〃　芸術学校講師
油科圭亮　〃　大学院理工学研究科
新宿区都市計画部